

東中学校校歌

作詞 阿達善雄
作曲 埜上 定

1 東雲^{しのめにあうし}二王子^{にかす}に 明けそめて
山々^{かす}霞^{ごす}む 五頭^{ごず}飯^い豊^{いで}
理想^{りきう}の高嶺^{たかね} 仰ぎ^{おほ}つつ
遥^{はる}けき道^{みち}も いざ^い行^いかむ
遥^{はる}けき道^{みち}も いざ^い行^いかむ

※東雲 明け方という象徴語

わが東中の夜明けは、真向こうの二王子山が明るく、くっきりと浮き出され、やがてその他の越の山々が遠くに霞んでいるうちに、しだいに五頭連山・飯豊連峰の頂も見え始める。

私達はこのような山の嶺のような高い理想と目標をもって、人生の険しい遠い道であっても、くじけることなく勇を鼓舞して、まっしぐらに
さあ、行こうではないか。

2 陽炎^{かげろう}ゆらぐ 畠^{はた}の上
紅^{くれない}映^はゆる 山^{やま}の色
松^{とすぎわ}の常磐^{ほうぜんどう}を 奉^{ほう}先^{ぜん}堂^{どう}
心^{こころ}は一つ もろ^{もろ}ともに
心^{こころ}は一つ もろ^{もろ}ともに

※松の常磐 参勤交代の時代の松
※奉先堂 奉先 何よりも大切に
(掛詞)

私どもの故郷は春になれば、うららかな陽ざしの中に、田園や畠にかげろうがゆらぎ、木々の花々が美しく咲き乱れる。

また、秋になれば山の樹々が紅葉の色も美しく照り映え、実に桃源郷ともいふべき所である。

その上、旧街道の杉並木や奉先堂の松などは、わが里の歴史を静かに私達に語っている。黙してもしっかりと心を変えることのない常緑の、そして、人の目立たない松の常磐を、われわれ一同の心として大切に、手を携えていっしょに、
さあ、進もうではないか。

3 流れてやまぬ 加治川^{かぢがわ}や
飛びゆく隙^{ひま}の 梭^ひを惜^{おぼ}しみ
たゆまぬ努^{つと}め 培^{つちか}いて
桜^{はな}に歩^ほ々の 花^{はな}を見^みむ
桜^{はな}に歩^ほ々の 花^{はな}を見^みむ

※隙^{ひま}の梭^ひ 刻々と去って行く時間

私どもの里は、新発田藩の頃、会津領と境を接していたために、いろいろと歴史的な事蹟が多い。それらは幾多の歴史を秘めて流れている加治川と、時の流れの中に忘れ去られてしまうかのようだ。

このように時というものは、たちまちに過ぎ去って行くものであるから、私どもは、わずかの時でも惜しんで努力し、たとい、小さくとも、その目的を達成してその努力の成果を、校庭の桜の花の美しく咲いたのを一步一步見て楽しむように、「ああ、一生懸命やってよかった。」と心の中で悠々と満足して、

さあ、自分をほめることのできる
人間になろうではないか。